浄泉寺 通信

第23号

仏教学者の石飛道子（いしとびみちこ）さんをお招きし、10月9日に第5回「法話会」を開きました。以下はその抄録です。

講師の石飛道子さん

人間を蓮華にたとえたブッダの言葉が残っています。世界を見渡すと人間は九種類に分かれる。汚れの少ない者と多い者、感覚の鋭い者とそうでない者、善い形相の者とそうでない者、教えやすい者とそうでない者、来世に恐れを抱く者。それはまるで青い蓮華や赤い蓮華、白い蓮華のようで、それぞれに水面から出ないもの、水面に接して立つもの、水面から出て立つものの三通りあって九種類あるのと全く同じだと。

さらにブッダはどう生きるべきかを説いています。欲望がかなったときは嬉しいものだが、かなえられなかったとき、人は壊れていく。ゆえに自らの欲望に気づき、避けて生きるべきだと。気づくことによってそれ以上の欲を抑えることもできると。

わたしたちは暴流（ぼうりゅう）に翻弄される舟のようだとも言っています。人生という暴流に漕ぎ出して、向こう岸に渡らなければならない。しかし舟は壊れて水漏れしている。些細な水漏れも、やがて舟を沈めるほどの水になることがある。そうならないよう、気づいたら水を汲み出しなさいとブッダは言います。壊れていない舟が良いに決まってますが、わたしの舟は所詮壊れているわけです。壊れた舟しかわたしには無いのです。手元にある、使えるものだけで彼岸を目指して渡るわけです。

かくいうブッダはどのようにして暴流を渡ったのか。ブッダは言いました。「わたしは止まることなく、力を入れてもがくことなく、暴流を渡りました。立ち止まるとき、実際、沈みます。力を入れてもがくとき、実際、流されます。だから、立ち止まることなく、力を入れてもがくことなく、暴流を渡ったのです」。

大乗仏教では向こう岸へ渡る、到彼岸（とうひがん）ということがよく出てきますが、小乗仏教にはあまり語られません。人間は欲が湧くものです。しかしそれを避けるようにとブッダは言います。欲を避けること、そして水が入ってきたら掻（か）き出すこと。その二つで人生を生きていくことができると。誰かこの方法で、彼岸に渡った人がいるだろうかと探したら、妙好人（みょうこうにん）に出会いました。妙好人とは浄土真宗の篤信（とくしん）の信者のことで、なかでも因幡（いなば）の源佐（げんざ）さんが知られています。妙好人の語源は「念仏するものは人中（にんちゅう）の分陀利華（ふんだりけ）なり、妙好人なり」（善導大師『観無量寿経疏』）。

源左さんは18歳で父を亡くします。父は「おらが死んで淋しけりゃ、親をさがして親にすがれ」と言い残したそうです。以来父が言っていた「親」をさがして仏法を聞き、三十歳を過ぎたある日、牛を連れて草刈りの帰途、自分が背負っていた草を牛の背に負わせた瞬間、ふいっとわかったそうです。親にすがれとは阿弥陀如来にすがるということで、親はこのわたしの生も死も引き受けると言っているのだと。

『妙好人　因幡の源左語録版画集』
長谷川富三郎 作より

ブッダが入滅されて500年たって、インドに龍樹菩薩という方がお生まれになりました。仏教中興の祖と言える方です。それから800年ほどたって日本に親鸞聖人がお生まれになられ、念仏と信心という二つのことばをもとに仏法は再び大きく花開きました。さらに幕末から明治大正にかけて妙好人が現れました。仏法は長い年月の間にどれだけ変わったのか、あるいは変わっていないのか。阿弥陀如来も念仏も、ブッダが残したことばには元々ありません。しかし、ブッダのことばをきちんと読み解けば、大乗仏教こそブッダの教えだとわかります。智慧と慈悲は阿弥陀如来となって具現化し、彼岸にわたる方法は信心と念仏によって確立されました。それは源左さんが証明しています。小乗仏教に伝わるのは出家者が彼岸にわたる方法であって、わたしたち凡夫は凡夫に適した方法で彼岸を目指さなければなりません。凡夫は蓮華のように様々な色があるのですから。（談）

寺おこし事業の取り組み紹介

地域資源の活用1

帰省時に宿泊できるゲストハウス <四州教区、山口教区>

●帰省支援、参拝機縁づくり

「盆参りに帰省するが、宿泊する家がない」「空き家の管理ができておらず、ホテルに宿泊している」との声から、
①"みんなの家"というゲストハウスを境内に建てる計画をしている寺院。
②門徒の"空き家"を買い取り、ゲストハウスにしている寺院があります。

空き家を買い取った例

門徒の空き家を定住希望者に紹介 <山陰教区、山口教区>

●U･Iターン、定住の支援、新たな縁作り

「行政の定住支援は"空き家バンク"の家を紹介するだけ」「地域の良さや、生活に関係することを教えてくれない」との新規定住希望者(U･Iターン者)の声から、住職が、「寺院で把握している"門徒の空き家情報"」によって、行政とU･Iターン希望者双方をつなぐ役割をしています。
結果、
①定住者が住むことで空き家が維持・管理され、収入ができる。
②定住希望者は安価で定住が実現できる。
③お寺と新規定住者の縁ができる。
ということにつながっています。

(左)活動を取り上げている市のU･Iターン情報誌

民家を聞法道場にするという方法 <東京教区>

●既存の寺院形態にとらわれない新しい寺院の提案

都市開教の拠点として、既存の寺院形態にとらわれない新しい寺院を提案しています。
古民家の当初の所有者は、養蚕を営んで隆盛を極めた豪農だったであろうとのこと。
梁と柱が大変立派です。主な工事は、梁や柱、床をできるだけそのままに、水回りを新たに設置して、耐震強度を高めるというもの。
ご本尊と仏具一式は所属寺が代務を引き受けていた寺院から譲り受けています。

古民家を寺院にされた寺院例

浄土真宗本願寺派

わたしたちのご本山、西本願寺（京都市下京区）がこのほどとりまとめた「今後の寺院の在り方、存続の方途」のなかに、先進事例として浄泉寺が選ばれました（左写真の一番下『民家を聞法道場にするという方法』＜東京教区＞）。この報告書はご本山でいまパネル展示されていて、このなかで「既存の寺院形態にとらわれない新しい寺院の提案」と最大限の評価をいただいています。

人口減少と人口移動による過疎と過密が続き、お寺をこれまでと同じように維持していくことは難しくなっており、全国各地の浄土真宗本願寺派寺院は岐路に立たされていると言えます。ご住職と檀信徒の皆さまがそうした危機感を共有し、様々な取り組みが進められています。才能あるご住職や個性的な坊守様（住職夫人）による、お寺を舞台にした多様な活動もそれぞれに注目されています。皆さまに「わたしの家のお寺はこんなことやってるよ」と自慢していただけるお寺を目指して、浄泉寺も変化を恐れず前進していきます。

【１０月、１１月、１２月の活動】

10月15日(土)９時（偶数月開催）
　写経会（浄泉寺）
10月21日(金)19時（毎月第三金曜日開催）
　親鸞聖人御消息講座(第３４回)（フレサよしみ）
11月17日(木)19時
　親鸞聖人御消息講座(第３５回)（フレサよしみ）
11月27日(日)10時30分（奇数月開催）
浄泉寺コーラス練習（浄泉寺）
12月16日(金)19時
　親鸞聖人御消息講座(第３６回)（フレサよしみ）
12月17日(土)９時
　写経会（浄泉寺）
12月31日(土)16時
　除夜会（浄泉寺）
毎月第一日曜日　１０時　あいる書道会（浄泉寺）

◆わたしたちのご本山、西本願寺は親鸞聖人からの血脈を今につなぐお寺です。すべての事業がそうであるように、西本願寺がたどった歴史は波乱に満ちたものでした。ブッダの教えを信心と念仏によって伝えるということは、形のないものを伝えるということからして難事業を極めたはずです。そして今、親鸞聖人から数えて25代目のご住職が、西本願寺に就任されました。それをお祝いする法要が来年5月まで、西本願寺で勤められています。祝賀の書道展へ浄泉寺書道会として児童たちの作品を届けることができました（写真）。わたしが西本願寺の練習生として門をくぐったのは28歳のとき。当時のご住職のおつとめを初めて聴いて、親鸞聖人の肉声もこうだったのではないかと、歴史上の人物でしかない親鸞聖人が、あたかもそこに座っておつとめしておられるかのような感動を覚えました。それは血脈だからこそ感じたのでしょう。（住職）